

和服の後幅・肩幅の差による縫製方法の考察

聖徳大学短大部 片柳知代子 ○能美千代子

目的 近年若年女子の体位は著しく向上している。本研究の実験に当って、生活文化学科服飾造形コース1年生和裁履修者70名の身体計測を行った。その結果に基づいて後幅・肩幅の差による縫製上の検討、大裁ち女物ひとえ長着（ゆかた）を製作して、着装状態、縫い代の始末、外観等の是非等について比較検討を行った。

方法 裾の計測は、布製エンビコーティングしたテープメジャーを用いた。立位正常姿勢で、右上肢を水平に上げてそのまま45度の位置に下げて第七頸椎から肩峰点を通り、尺骨茎突点まで計測した。腰囲の計測で割り出された後幅と肩幅の差は2cm以下が17.3%、3cm~4cmが63.8%、5cmが18.9%で、3cm~4cmが最も多かった。後幅と肩幅の差による縫製方法は、身八つ口より、15cm~身丈の1/2まで下げて肩幅と結ぶ方法等は各種行われてきた。本報では脇の縫い代のみでなく、背縫いを縫い込む等の方法でゆかたを作成した。平成4年度学生が作成したゆかたの幅は、37cm~38cmが最も多く、39cmも数反あった。

結果 着装については、和服に関する専門知識をもった数名で、側面、及び背面は、静止と歩行時の観察を行った。異なる評価はあったが、外観上の劣化は少い傾向が認められた。今後更にひきつゞき検討を試みていきたい。本研究に当り御協力いただきました諸先生、被験者の皆さんに厚く御礼申し上げます。